

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

第5回西地区登山部顧問雪山研修会報告② 西部伸也先生より

翌10日、7時朝食、8時過ぎにいこいの村を出発（大佐山下山後、現地で解散とするため、全員自分たちの車で移動）。当初予定の臥竜山登山口となる八幡高原に立ち寄ったのち、8時50分、大佐スキー場手前の「空き地」に到着。残念ながら夜間の降雪はなく、積雪量は前日と変わらないが、淡い期待を抱いて5人ばかりがスキー・スノボを担いで出発（9時5分過ぎ）。歩行班も、全員ではないが多くがスノーシュー・ワカンをこの日は持参する。出発点の標高は700mと前日よりも低いため、所々土の覗く道を歩いて行くが、100mばかり歩いて、老朽化のために今は使用されていないケビン群を抜けるとゲレンデの下部に出る。そこからは所々草が覗いておりはするものの、スキーを履いても差し支えない。スキー場には人工雪があるため、そこはある程度の人で賑わってはいるが、我々はそこから少々離れたゲレンデの脇を登っていく。私は今シーズン新調したステップ付きの板（センター幅88mmでやや広め）だったのでシールを付けずに登るが、全く問題なし。岡崎先生もステップ付きのクロスカンリースキーで登っている。標高差で60mばかり登ると、その先には急斜面もある中間部ゲレンデとなるが（チャンピオンコース・ジャイアントコース）、ここは人工雪がないため、リフトは休止中だ。したがって我々だけが登っていく。急斜面には林道状の迂回コースもあるため、ステップ付き板はノンシールでも大丈夫だ。中間部ゲレンデの上（標高920m～）には、緩斜面・中斜面のゲレンデが山頂手前200m（標高1020m）までさらに延び、スキー最盛期の頃にはそこも賑わっていたが、スキー客の減少した近年は運休のままで、リフトの椅子も取り外されたままだ。したがってここは、降雪があればバックカントリー入門にうってつけとなる。



大佐山頂上にて

出発して1時間15分後に全員が山頂に到着。山頂で記念写真を撮ったのち、10時35分過ぎ、めいめいが下山していく。スキー・スノボ班もいよいよ滑降だ。残念ながら積雪は10cm程しかないが、滑降は決して不可能ではなかった。最後はスキー・スノボ客で賑わうゲレンデ脇にシュプールを描き、20分少々でスキー場駐車場脇に到着。あとは車道を100mばかり歩いて、朝止めた車の所へ。歩行班も下山は速く、11時15分頃には全員が下山し、11時25分より閉会式。雪山研修会の一応の成功に全員満足。ただし、雪不足は否めなかったため、今月最終土日（1/30～31）場所は大山で、第2弾研修会が田中初四郎先生を中心に企画されていることを皆さんにお伝えし、また再会できることを楽しみにして、11時30分、解散となった。

読図技術のスタンダード化に向けて

昨年末、静岡大学の村越真さんから、「読図技術の指導者のための研修会」のお誘いが

あった。主催は（公社）日本オリエンテーリング協会、参加要項には「2日間の日程で、登山やアウトドア活動の安全に資する読図・ナビゲーション指導スキルのための研修会を開催します。日本ではこの分野をリードするコーディネーター、研修リーダーが参加しますので、皆様のスキルアップの機会に利用いただければ幸いです。」とあった。

講習会全体のコーディネーターは村越真さん、研修リーダーは田中正人さん（日本アドベンチャー協会）・小泉成行さん（日本オリエンテーリング協会）が務めるという内容だった。参加資格はアウトドアや山岳での読図・ナビゲーションの指導を行っている方、または今後指導を行うことに興味を持つ者ということであり、そういう人たちを対象にあくまで読図指導技術の研修会として行うものであり、参加者に読図技術を教える場ではないということが明記されてもおり、僕にとっては多少敷居が高いかなと思いがらの参加であった。12月16日、会場の飯能市に緊張しながら向かった。参加者はオリエンテーリング、ロゲイニング、トレラン、アドベンチャーレースなどの現役選手や大会運営にたずさわっている方などその道の達人ばかり18人。・・・いわゆる山やの世界とはちょっと異質の世界に足を踏み入れてしまったのではないかと内心ビクビク。

この研修会の参加者には、「事前に知らされたコースで、対象者（初級・中級・上級・熟達者）を設定して読図講習会を行うための指導案を作成してくること」という事前課題が出されていた。日中の研修は、そのコースでの指導実技（模擬実技）である。これはある一人が指導者役、その他の数人の研修生が受講生役、残りは観察者となり指導案に基づいて、実際にやってみるといふ学校でいえば研究授業のような形での実践的な研修会である。僕自身はこれまで自分自身が行ってきた内容をもとに、初級者対象で、地図のイロハから教えるというつもりでカリキュラムを構成して持参した。指定されたコースを辿り、区間を区切りながら役割を交代しながらそれぞれの方法で教えたり教えられたり、またそれを批評したりして研修を深めた。僕自身の部分でいえば、教師の悪い癖なのか、やはり一度にいろんなことを教えすぎたり、しゃべりすぎたりしているのではないかという指摘があった。それぞれ想定されるレベルの受講生に、そのコースのどこで何を教えるのかを明確にしないと結局あまり身につかないのではないか？それぞれその世界においては一家言をもっている方々の集まりだけに、それぞれの方の読図能力はもとよりその教え方やアプローチはさすがと思わされることしきりだった。

夕刻からは、昼間の実践をもとにしたがらの室内研修。その中では当初の予定通り読図技術の指導カリキュラムを立てることを中心に、対象者のレベル（グレード）わけに関する統一基準の必要性、言い換えれば、それぞれのレベルの到達目標も議論された。もしこれをきちんと定義付けすることができれば、昨年、長野県山岳総合センターと長野県遭難協が作成し、現在は近隣の3県（富山・新潟・静岡）にも広がっている「山のグレーディング」（これについてはまた別の機会で論じたい）の技術的難易度に対応させられるのではないかということも可能性として議論された。長野にいと、あまりは感じないのだが、全国の遭難事故をその態様で分類すると、道迷いはおおよそ40%でもっとも多い（長野では転滑落によるものがもっとも多く、道迷いは10%前後）とのこと。遭難事故を減らすために長野からはじまった「山のグレーディング」を今後日本中に広げていく（実際にその流れができつつある）とすれば、この視点はかなり重要な眼目になる。いずれにせよ、読図について普段接している登山者の視点とはまた違った観点を知らることができる貴重な2日間だった。